

徳富蘇峰記念館

百家書簡展 (7)

昭和六十二年二月一日〜十二月十日まで

蘇峰主宰の「国民之友」及び「国民新聞」の出版基盤である民友社が設立されたのは一八八七年（明治二十年）ですから、昨年民友社は創立百年を迎えたこととなります。そこで民友社創立百年を振り返り、蘇峰が影響を受けた人、蘇峰と主義主張は異なっている、国を思う気持で共鳴していた人、日本の近代化の流れの中で、独自の主張をした人々の書簡を集めてみました。蘇峰が影響をうけた人々についてはいままでの特別展でくりにかえし展示してきました。

今回の展示の特色は、従来明治・大正の書簡にかたよっていた書簡の選びかたを、大正・昭和から多く選ぶようにしたこと、ジャーナリスト関係者を多く選んだこと、新島襄・八重子、徳富一敬・久子、徳富蘇峰・静子、国木田独歩・信子、与謝野寛・晶子、岡本一平・かの子、東条英機・かつ子、徳富蘆花・愛子、相馬愛蔵・黒光等の夫婦の書簡を展示したこと、夫人の書簡は夫の陰に隠れている存在であったかもしれないませんが、夫婦は人間のいとなみの重要な単位であると思われるからです。蘇峰の交遊の広さと深さから、魅力のある書簡が多く、百人を選ぶことは難しいことでした。この不備を補うために来年からは分野ごとの展示にし、十分な人々の書簡を紹介したいと考えています。

ジャーナリストの分野では、蘇峰の出世作となった『将来之日本』を出版した、経済学者で『東京経済雑誌』の創刊者田口卯吉から、終戦後、公職追放免除になった蘇峰に、文筆活動の復帰の機会を提供し、『三代人物史伝』を『読売新聞』に掲載した『読売新聞』の社長正力松太郎までをとりあげました。その他『朝野新聞』等で筆禍事件をおこした末広鉄腸、西園寺公望と共に『東洋自由新聞』を創刊し、フランス流民権思想を唱えた中

江兆民、その弟子でフランスに渡り、日本に最初にメーデーの様子を通信し、ヨーロッパの社会主義を伝えた酒井雄三郎、『報知新聞』の主筆で改進黨の矢野龍溪、『日本人』を創刊し、国粹保存主義を唱えた政教社の志賀重昂など、政治家であり文筆家であり思想家であった人々の書簡も展示しました。又『国民新聞』から独立し、『独立評論』を創刊した山路愛山、大阪で『朝日新聞』を創業した村山龍平、『大阪毎日新聞』の社長本山彦一、『改造』の山本実彦、『主婦の友』の石川武美、『中央公論』の嶋中雄作、『文芸春秋』の菊池寛、講談社の野間清治など、同じジャーナリズムの世界で、蘇峰とどのような理解と友情があったかが知られる書簡も興味深いものです。

自由民権運動家植木枝盛は明治二十一年に婦女の参政権、男女の同権を唱えた『婦女之権利』を出版することを蘇峰に頼んでいます。東京婦人矯風会の幹部であった佐々城豊寿は、明治二十五年枝盛が死んだとき、『百人の政治家を喪ふより惜しく、特に婦人社界のために惜むべく、以後は女権拡張の道を止めたる如く感有之』と嘆きました。日本のキリスト教の長老となった小崎弘道は、明治二十年板垣退助が爵位をもらうことを断然辞すべきであると主張し、板垣と特別の交際のある蘇峰に『大兄何ぞ同氏の為に一言せざる』とつめよっています。森鷗外の書簡をとりあげるとき、『ドイツで鷗外の親友であったといわれる画家原田直次郎の書簡も選びました。直次郎の書簡には中江兆民の名刺が同封されていますので、中江とも交遊があったのでしよう。直次郎は、『国民之友』の表紙を明治二十二年ごろ受け持っていたようです。『欧州諸新聞、雑誌等をも相調べ候へ共、一色ものにては充分目立候もの無之残念に存申候』とあるように、蘇峰が外国婦人の直次郎にアイデアを求めていたことが窺われます。鷗外の遺言で墓標を書いた中村不折の書簡も展示しました。

内村鑑三はアメリカで、新島の親身の助言で新島の母校アマースト大学に学んだそうです。内村が明治二十四年に発布された教育勅語に頭をさげなかつたという「不敬」事件で教育界を追われようとしていた時、再び内村を世間に引き出したのは『国民之友』主幹の蘇峰であったと川喜田愛郎氏が書いています（『百年の日本人』）。日清戦争の意義を世界に知らすために、内村は蘇峰に自著の出版を願う『英文 日本及日本人』が民

友社から明治二十八年に出版されました。このように蘇峰との関係を見ていくと、横の關係にさまざまな人物が登場し、交遊の輪が広がっていくのを面白く感じます。

新島の書簡は書簡集が出版されていますが、当館のものは未発表のもので、蘇峰に読んで後焼いてくれと注記のあるものです。新島先生の蘇峰への信頼の大きさと、同志社の将来を思う苦悩が伝わってくるような内容です。妻八重子の書簡は亡き夫を思う妻の気持ちがあつてと書かれていて胸を打つものです。静子夫人が蘇峰の外遊先での病気を知った時の手紙は、夫婦愛にあふれたもので、平凡で水のような存在であると蘇峰が語っていた妻の像と大に異なるものです。東条かつ子夫人は蘇峰の優しいいたわり

に感謝しています。足尾鉍毒事件の指導者田中正造は、明治二十四年「国民新聞」が発行停止になった時「是れ全く貴社が平生より忌憚なく正論を主張いたされ候結果たるに過ぎず候へば、不肖はかえつて貴社のイツモながらの痛言をよろこび申候。尚ほ之に屈せず倍々勇気を奮て忌憚なく御評の程希望に不堪候」と見舞っています。「国民新聞」も足尾鉍山問題を詳しくとりあげています。

蘇峰と深井英五が明治二十九年欧米に漫遊に出かける直前に届いた新渡戸稲造の書簡は、アメリカの知人への紹介状を、相手の宗教、好みまで添えて詳しく書いているほど親切なものです。

大実業家渋沢栄一は同志社に多額の寄付をした人ですが、蘇峰に書類の不備を注意し、小さなことをおろそかにしない誠実な態度を示しています。三井財閥の基礎を築いた益田孝の書簡からは、蘇峰がしばしば茶席に呼ばれ、いろいろ人脈を広げているありさまがわかります。偉大な実業家大原孫三郎が、青年を育てようとする愛情は、蘇峰に将来ある青年の人选を頼み、明治三十六年に月に八円づつを貸与していることから窺えます。

日本で最初に西域探検を試みた西本願寺の法主であった大谷光瑞の書簡が、二四〇通余あることは貴重なことです。光瑞には友達が少なく、本願寺の方の話では光瑞が心から兄事していたのは蘇峰ぐらいであったろうということ。光瑞の弟子橘瑞超も蘇峰の人間味のある優しさに、光瑞によりもなつていたのでないかと感じさせる文面です。

賀川豊彦は蘇峰の福祉事業への理解と応援に感激した書簡を出しています。「何か知らないが、それは主義とか理屈とかその面倒なものからでなくて、私は先生に「人間らしさ」に云ひ知れぬなつかしきを見付けて居ります。それであなたが帝国主義者であろうが、皇室中心主義者であろうが私には少しもかまいません」(大正十年)と。

岡本一平は妻かの子の『仏教読本』のために蘇峰に推薦状を願ひ、かの子は東京劇場で上演される自分の宗教戯曲の券を二枚送っています。原稿用紙一枚に消したり書き加えたりしたペン書きの手紙は、かの子からの他の二通の筆跡と全く異なるものです。美しい墨跡の二通は多分同居していたといわれる二人の恋人が、清書したかの子の書簡なのでしょう。

昭和十年代の松岡洋右、永井柳太郎、中野正剛、緒方竹虎、東条英機の書簡は、正直な心情を述べ、それぞれの国を思う真実が伝わってくるものです。

幸田露伴、尾崎紅葉、山田美妙、坪内逍遙、岡倉天心、佐々木信綱などとの交遊はいままでいくどか紹介しました。巖谷小波が紅葉全集出版のため蘇峰の助力を願ひ、斎藤茂吉は島木赤彦の葬儀に蘇峰の出席を望みました。島崎藤村、吉屋信子、吉川英治、安部磯雄、柳田国男等の書簡は、今回がはじめての展示です。

展示した人、一人ずつについてのエピソードを書いていくときりがありませんが、蘇峰へ書簡を書いた人々を追っていくと、そこには近代日本を歩んで来た人の足音が聞えてくるような気がします。

最近日本の近代化を人物で追う企画が目につきます。たとえば『日本のリーダー』(TBSブリタニカ全十五巻)、『言論は日本を動かす』(講談社全十巻)、『百年の日本人』(読売新聞社全三巻)などです。『日本のリーダー』では蘇峰は「気骨の思想家」として、福沢諭吉、中江兆民、吉野作造、西田幾太郎と共に第十二巻に登場しています。『言論は日本を動かす』では、「日本を発見する」として、陸羯南、志賀重昂、新渡戸稲造、小泉八雲、魯迅等とともに第四巻に登場しています。『百年の日本人』には六十九人が登場しており、その半数は蘇峰と交際の深い、共に同世代を歩んだ人たちですが、これに蘇峰が登場していないことは残念に思います。

戦後四十年以上たった現在も、蘇峰の評価は戦争体験の如何によつて異

なっています。明治・大正・戦前の蘇峰が、日本の近代化の中で果たした役割は、戦後の蘇峰評価によって全て否定されるような小さなものではありません。それを乗り越えるためにも、これからの蘇峰研究が、昭和の蘇峰のありのままの研究に向けられることが望まれます。日清、日露、第一次世界大戦、日中戦争を経験してきた蘇峰が、なぜ第二次世界大戦で、愛国的開戦論者、戦争遂行者であったか、その研究こそ重要な課題であると思います。当時の蘇峰は孤立していたわけではありません。蘇峰があのような勢いを持ちえた時代の背景を究明することが重要であると思います。『百年の日本人』の中で谷川徹三氏は岩波茂雄について次のように書いています。「世間で、左翼右翼などという簡単な分け方をして人を評価しているのに岩波さんは同調せず、どれだけの誠実をもって我が道を貫いているかに人物の評価の基準を置いた」と。私も蘇峰に関して同じ思いがします。

(学芸員 高野静子)

昭和六十三年一月

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

「百家書簡展」一覧表

注 〔書簡数のうち()内は空封筒
〔 〕内は筆写されたものを示す。
人物の解説はコンサイス人名辞典(三省堂)等による〕

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
安部磯雄	慶応1～昭和24	福岡		1	キリスト教社会主義者、同志社出身。日露戦争では非戦論を唱えた。日本社会党顧問。早大野球部長、学生野球の父といわれた。
阿部真之助	明治17～昭和39	群馬		1	ジャーナリスト・評論家。毎日新聞社取締役。人物評論を得意とする毒舌で知られた。
会津八一	明治14～昭和31	新潟		2	歌人、書家、美術史家。
石川武美	明治20～昭和36	大分		109	「主婦の友」を創刊、日本出版会会長。太平洋戦争中の出版統制に一役買った。関東大震災後国民新聞に出資し、合資会社とした。 蘇峰の成貨堂文庫を全て買取った。現在は、主婦の友会館のお茶の水図書館にある。
伊藤博文	天保12～明治42	山口	春 畝	3	初代総理大臣。天皇制確立のために努力した。日清戦争を強行。日露戦争後初代韓国統監。明治30年以後蘇峰と伊藤との関係が深まる。
犬養毅	安政2～昭和7	岡山	木 堂	7	29代総理大臣、立憲改進黨創立に参画。昭和4年政友会総裁に選ばれる。5.15事件で射殺される。
井上馨	天保6～大正4	山口		10	尊王攘夷を主唱。後伊藤博文とイギリスに留学。維新後新政府の外交財政の衝に当たる。
井上毅	弘化1～明治28	熊本	梧 蔭	7+(2)	官僚、大日本帝国憲法の起草、制定の総仕上げをおこなった。教育勅語の制定に尽力した。中江兆民、蘇峰とも文学論を交わした。
巖谷小波	明治3～昭和8	東京	季 雄	18	小説家、童話作家。〈硯友社〉同人の新進作家。児童文学に貢献した。
植木枝盛	安政4～明治25	高知		28	政治家・思想家。天賦人權論、普通選挙、婦人解放などの体系的な革命論を建設した。 自由民権運動の指導にあたった。
浮田和民	安政6～昭和20	熊本		75	政治学者。熊本洋学校、同志社出身。大正デモクラシーの先駆的な役割を果たした。 早大の教授、雑誌「太陽」の主幹として活躍。吉野作造に影響を与えた。
内村鑑三	文久1～昭和5	群馬		5	キリスト教の代表的指導者。教育勅語に対する敬礼を拒否して一高免職。日清戦争に際して〈義戦論〉を唱える。日露戦争には非戦論を主張し「万朝報」を退社。
大隈重信	天保9～大正11	佐賀	八太郎	13+(1)	8代・17代の総理大臣。立憲改進黨を創立し総理となる。条約改正の交渉に失敗、玄洋社員に爆弾を投げられ片脚を失う。 東京専門学校(早大)を創立、早大総長となる。
大倉喜八郎	天保8～昭和3	新潟	鶴 彦	43+(2)	大倉組を組織し、大倉財閥をきずきあげた。大倉商業学校(現在の東京経済大学)を設立。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
大谷光瑞	明治9～昭和23	京都	鏡如	240	西本願寺宗主、歌人九条武子の兄。貞明皇后の姉箒子と結婚。日本で最初に西域探検を行なった。大正3年多大の負債の責任をとり、本願寺住職・管長職を退く。以来アジアを放浪す。 仏教を柱とした国家主義(大アジア主義)を唱えた。
大原孫三郎	明治13～昭和18	岡山		16	実業家。倉敷紡績社長、関西財界の重鎮となる。 大原社会問題研究所、大原美術館を設立した。
岡倉天心	文久2～大正2	神奈川	覚三	4	美術行政家・思想家。東京美術学校校長、日本美術院を創立した。日本および東洋の文化・芸術の伝統的優秀性を内外に訴えた。
岡本一平	明治19～昭和23	北海道		2	漫画家。東京朝日新聞社に入社。政治漫画に一時期を画した。
岡本かの子	明治22～昭和14	東京	カノ	2	歌人・小説家。岡本一平の妻、岡本太郎の母。歌人として出発、仏教研究の著書も出す。小説家としてユニークな作品を書き続けた。
緒方竹虎	明治21～昭和31	山形		15	政治家。「東京朝日新聞」主筆。戦時下の言論統制にあたった。自由党総裁に就任。
尾崎紅葉	慶応3～明治36	江戸	徳太郎	1	硯友社を結成、「我楽多文庫」を出す。読売新聞社に入社し「金色夜叉」など主要作のほとんどを同誌に発表。
尾崎士郎	明治31～昭和39	愛知		1	早大中退。「人生劇場」がベストセラーとなる。
尾崎行雄	安政6～昭和29	神奈川	悞堂	34+(1)	政党政治家。桂内閣に対する鋭い追及は彼に〈憲政の神様〉の名をもたらしに至った。翼賛選挙を批判し不敬罪の起訴を受けた。東京市長。
賀川豊彦	明治21～昭和35	兵庫		11	キリスト教社会運動家。神戸の貧民窟で無料巡回診療を始める。自伝的小説「死線を越えて」は、当時の一大ベストセラーとなった。
堅山南風	明治20～昭和55		熊次	22	日本画家。日光東照宮の鳴龍を復元。
勝海舟	文政6～明治32	江戸	麟太郎	10	日米修好通商条約批准のため咸臨丸艦長として、日本人最初の太平洋横断航海に成功。 将軍徳川慶喜の意をうけ、官軍の西郷隆盛と会見し、江戸城の平和的明け渡しに成功した。
桂太郎	弘化4～大正2	山口	清澄	27	11代、13代、15代の総理大臣。陸軍軍人。台湾総督。日英同盟の締結に尽力した。官僚政治家として実権をにぎった。内大臣兼侍従長となる。 徳富猪一郎編「公爵桂太郎伝」全2巻
川上操六	嘉永1～明治32	鹿児島		5	陸軍軍人(大将)。日清戦争には大本営参謀として従軍。強硬な主戦派として有名。 「陸軍大将川上操六」(徳富猪一郎著)
川端龍子	明治18～昭和41	和歌山	昇太郎	3	日本画家。〈会場芸術〉を唱え青龍社を結成し自ら主宰。文化勲章受章。大作蘇峰像を描く。
菊池寛	明治21～昭和23	香川		8	小説家・劇作家。「時事新報」の記者となる。「恩讐の彼方に」で一躍流行作家となる。雑誌「文芸春秋」を創刊、新人発掘などに功績を残した。菊池寛賞が制定された。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
北里柴三郎	嘉永5～昭和6	熊本		3	細菌学者。コッホに師事、破傷風菌の純粋培養に成功。私立の北里研究所を設立。
九条武子	明治20～昭和3	京都		3	大谷光瑞の妹。才色兼備の歌人として知られた。仏教婦人会長等各種の社会慈善事業に尽力。
国木田独歩	明治4～明治41	千葉	哲夫	1+(1)	詩人・小説家。日清戦争の従軍記者となる。佐々城信子との恋愛結婚から離婚へと波乱に満ちた生活を送る。「武蔵野」「忘れえぬ人々」など、自然主義文学の先駆者といわれる。
国木田信子				1	独歩と結婚。5ヶ月後に離婚。
小泉信三	明治21～昭和41	東京		1	経済学者・教育家。慶大塾長として大きな社会的影響力を持った。皇太子明仁親王の教育にあたる。
幸田露伴	慶応3～昭和22	江戸	成行	10+(1)	小説家・随筆家。尾崎紅葉と並ぶ小説家として広く知られた。随筆、史伝、研究においても小説におとらぬ業績を残した。
小崎弘道	安政3～昭和14	熊本		9	キリスト教の指導者。同志社出身。新島襄の後を受け同志社総長となる。日露戦争には主戦論を唱える。靈南坂教会の創始者。
近衛文麿	明治24～昭和20	東京		23+(1)	34代、38代、39代の総理大臣。貴族政治家。新体制運動を進め政党解消、翼賛会の実現につとめる。東条陸相の主戦論の前に総辞職。GHQの出頭命令を受け服毒自殺。
西園寺公望	嘉永2～昭和15	京都	陶庵	2+(32)	12代、14代総理大臣。公爵、ソルボンヌ大学卒業。ベルサイユ講和会議首席全権として国際協調に努める。最後の元老として活躍。
斎藤茂吉	明治15～昭和28	山形		26	「アララギ」の中心的歌人。青山脳病院長、文化勲章受章。研究、評論の業績も多い。
酒井雄三郎	万延1～明治33	熊本		33	政治・社会評論家。中江兆民に師事。在仏中、社会問題に関心を寄せる。パリで客死した。
佐々城豊寿	嘉永6～明治34	宮城		49	東京婦人矯風会の結成に協力。婦人政治運動を志して「婦人白標倶楽部」を設立した。相馬黒光の叔母、国木田信子の母。
佐々木信綱	明治5～昭和38	三重	竹柏園	157+(8)	歌人・国文学者。「万葉集」の研究等にすぐれた業績を残した。「新詩会」をおこし、「心の花」を創刊。文化勲章受章。
志賀重昂	文久3～昭和2	愛知	矧川	58+(3)	地理学者。「南洋事情」「日本風景論」を著わした。雑誌「日本人」を発行し、国粹保存主義の論陣を張った。
渋沢栄一	天保11～昭和6	埼玉		12+(1)	実業家。1867年渡欧し各国の近代的産業設備や経済制度を見聞。実業界の指導的役割を果たし、500余に及ぶ会社を設立した。
島木赤彦	明治9～大正15	長野	久保田俊彦	3	歌人。「アララギ派」の代表的歌人。斎藤茂吉らと歌論の研究と普及につとめた。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解 説
島崎藤村	明治5～昭和18	長野	春樹	1	詩人・小説家。「文学界」を創刊。浪漫詩人として大きな業績を残したのち、散文へ転じる。自然主義の代表的作家として知られた。
島田 翰	明治14～大正4	東京	彦禎	7+(1)	漢学者。田中光顕に認められ、宮内省の秘蔵書を研究。蔵書は徳富蘇峰の成賀堂文庫にある。
嶋中雄作	明治19～昭和24	奈良		8	出版人。「婦人公論」創刊と同時に主幹となる。昭和3年中央公論社社長に就任。
下田歌子	安政1～昭和11	岐阜	平尾せき	8	女子教育家。歌子の名は歌才にちなみ皇后から受けた。華族女学校(学習院女学部)校長。実践女学校、女子工芸学校を創立した。
釈 宗演	安政6～大正8	福井		39	禅僧(臨済宗)。福沢諭吉に学ぶ。円覚寺派管長となり、欧州各地を周遊。政・財界・知識人への指導を通じて多くの信奉者をもった。
正力松太郎	明治18～昭和44	富山		34+(1)	政治家・実業家。敏腕な警察官僚の後、読売新聞社社長。A級戦犯として逮捕された。日本テレビ放送設立。科学技術庁長官、原子力委員長等を歴任した。
末廣鉄腸	嘉永2～明治29	愛媛	重恭	10+(1)	政治家・小説家。「国会新聞」を主宰した。衆院議員として活躍。政治小説「雪中梅」「花間鶯」等を執筆した。
相馬愛蔵	明治3～昭和29	長野		3	実業家。本郷中村屋を譲り受け、パン屋を始め、新宿に開店、特色ある店として知られた。
相馬黒光	明治9～昭和30	宮城	良	5	随筆家。明治女学校で藤村に学ぶ。インドのビハリ・ホースらの保護者となった。
田口卯吉	安政2～明治38	江戸	鼎軒	10	経済学者。「東京経済雑誌」を創刊。自由主義経済の立場から政府の経済政策を批判した。法博。
田中正造	天保12～大正2	栃木		3+(1)	政治家、足尾鉬毒事件の指導者。「栃木新聞」を創刊。古河財閥と政府にたいして被害農民の側に立って半生をかけて闘った。
高田早苗	万延1～昭和13	江戸	半峰	4	教育者・政治家。大隈内閣文相。大隈の後を受けて早稲田大学総長をつとめ近代的私学経営の途を開拓した。
高浜虚子	明治7～昭和34	愛媛	清	18	俳人・小説家。「国民新聞」俳句選者となる。「ホトトギス」を主宰した。文化勲章受章。
高群逸枝	明治27～昭和39	熊本		23	女性史研究家。長篇詩を発表した後、農民自治会に加わる。蘇峰に師事。
橘 瑞超	明治22～昭和43			31	探検家。真宗本願寺派の僧。第2次、第3次大谷探検隊員となる。ウイグル文学の研究に励み、その解説に成功した。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
坪内逍遙	安政 6～昭和10	愛知		17+(1)	評論家・小説家・劇作家。「当世書生氣質」「小説神髓」を著わした。日本演劇協会、文芸協会を設立。「シェークスピア全集」を翻訳。「早稲田文学」を創刊した。
寺内正毅	嘉永 5～大正 8	山口		25+(1)	18代総理大臣、陸軍軍人、初代朝鮮総督。シベリア出兵を強行し軍備拡張、大衆課税の増徴、言論弾圧を行ない世論の批判をうけた。米騒動によって内閣は崩壊した。
東条英機	明治17～昭和23	東京		15	40代総理大臣、陸軍軍人・政治家。対米英開戦の最高責任者。敗戦後ピストル自殺を図ったが失敗。A級戦犯に指名され絞首刑となった。
東条かつ子				17	東条英機夫人
頭山満	安政 2～昭和19	福岡		30	国家主義者。玄洋社を結成し、大アジア主義を唱えた。内田良平の黒龍会結成を背後で助け、対外強硬外交を主張、ポースら亡命家を援助した。
徳富一敬	文政 5～大正 3	熊本	淇水	18+(1)	漢学者、教育者。蘇峰・蘆花の父。横井小楠の高弟、熊本に私立中学校共立学舎を開校した。
徳富久子				2	徳富一敬夫人 東京婦人矯風会の会員
徳富静子		熊本		20+(2)	徳富蘇峰夫人 "
徳富蘆花	明治 1～昭和 2	熊本	健次郎	34+(116)	蘇峰の弟。「国民新聞」に「不如帰」を連載した。「黒潮」出版に際し兄への告別の辞を掲げる。〈大逆事件〉に際し一高で「謀叛論」という講演をした。
徳富愛子				33	蘆花夫人。東京女子師範を卒業。
留岡幸助	元治 1～昭和 9	岡山		104	社会改良家。キリスト教に入信。渡米し感化事業を学び、巢鴨監獄の教誨師となる。不良少年感化のための家庭学校を創設。
永井龍太郎	明治14～昭和19	石川		8	政党政治家。雑誌「新日本」主筆。雄弁・隻脚の大衆政治家として常に時流とともにあゆむ。普通選挙の意義を力説、のち全体主義的志向を強め、大東亜新秩序論者に変貌した。
中江兆民	弘化 4～明治34	高知	篤介	27+(3)	フランスに留学。〈仏蘭西学舎〉を開く。西園寺と「東洋自由新聞」を創刊。〈東洋のルソー〉といわれフランス流民権思想を唱えた。啓蒙思想家。「一年有半」の著者。
中西梅花	慶応 2～明治31	東京	幹男	11+(1)	詩人・小説家。読売新聞社に入り小説を発表。一時期国民新聞社の社員。「新体梅花詩集」を著す。浪漫主義誕生期の詩人。狂死したといわれる。
中野正剛	明治19～昭和18	福岡		17	「東京朝日新聞」記者時代、護憲運動に活躍。国民同盟を結成、東方会を率い民間における全体主義推進の尖兵をつとめた。官憲支配の強化に反撥して反東条色を強める。割腹自殺した。
中村不折	慶応 2～昭和18	東京	鉦太郎	3	洋画家。渡仏。太平洋美術学校長・美術協会審査員を歴任。また書に深い造詣を示し、書道博物館を設立した。森鷗外は墓に不折の書を刻むことと遺言した。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
長沢規矩也	明治35～昭和55	神奈川		8+(2)	書誌学者・辞書編修者・中国文学史・漢文学・和漢図書学を専攻。「明解漢和辞典」や数十部の和漢古書目録を編纂した。
新島 襄	天保14～明治23	群馬		8	キリスト教の代表的教育者、同志社創立者。アメリカに密出国して10年滞在。生涯キリスト教精神にもとづく教育に専心し、同志社の発展のために心血をそそぎ、その途上でたおれる。
新島八重子	弘化 2～昭和 7	福島		4	襄夫人。山本覚馬の妹。
新渡戸稲造	文久 2～昭和 8	岩手		3	教育者、札幌農学校時代にキリスト者となる。アメリカ留学。一高校長・東京女子大初代学長として学生に深い人格的影響を与えた。国際連盟事務次長として活躍。太平洋の橋になるという希望を実践した。
根津嘉一郎	万延 1～昭和15	山梨		3	政治家・実業家・帝国石油を設立して社長に就任したほか多くの社長を歴任した。昭4にいたり徳富蘇峰の「国民新聞」の社長をひきうけた。根津美術館が没後設立された。
野間清治	明治11～昭和13	群馬		8	大日本雄弁会講談社を創立。〈講談社文化〉を形成した。
鳩山 一郎	明治16～昭和34	東京		17	戦後鳩山内閣は憲法改正問題や日ソ国交回復に独自の政策を打出し、保守合同を実現。自民政権の基盤をつくりあげた。
鳩山 春子	文久 3～昭和13	長野		5	女子教育者。鳩山一郎の母。東京女子師範(お茶の水女子大)開校に応募入学。卒業後、母校の教師となる。共立女子職業学校(共立女子大)を創立、6代目校長となった。
原 敬	安政 3～大正10	岩手	健次郎	1	19代の総理大臣。初の政党内閣を組閣、〈平民宰相〉として世論の支持を受けた。しかし社会運動を弾圧、普選拒否、シベリア出兵などの強硬政策を遂行し東京駅頭で暗殺された。
原田直次郎	文久 3～明治32	江戸		19	洋画家、ドイツに留学。歴史画・風俗画を学んだ。留学中に森鷗外と相知る。画塾鐘美館を開設。明治美術会創立に加わる。洋画界の発展に力を尽した。
平福百穂	明治10～昭和 8	秋田	貞蔵	28+(1)	日本画家。写実主義をととなえ、国民新聞をはじめ雑誌や新聞に軽快洒脱な筆致を生かしたスケッチで生彩をそえた。金鈴社を結成。アララギ派の歌人としてもきこえた。
深井英五	明治 4～昭和20	群馬		100	財界人・官僚。国民新聞社、民友社に勤務した後、日本銀行総裁に就任。国際会議に列席する。貴族院議員、枢密顧問官に任命された。
二葉亭四迷	元治 1～明治42	江戸	長谷川辰之助	1	小説家・ロシア文学の翻訳家・近代日本文学史上最初の本格的リアリズム小説である「浮雲」を書く。言文一致体の翻訳は後の作家たちに強い影響を与えた。
益田 孝	嘉永 ～昭和13	新潟	鈍翁	62+(1)	実業家。幕府の使節に随行してフランスに渡る。三井物産の社長となり、三井財閥の基礎固めに尽力した。中国興業を設立。商業教育にも力を注いだ。茶人としても知られる。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
松岡洋右	明治13～昭和21	山口		11	渡米後、外交官となる。1933年「満州国」否認決議に抗議して国際連盟総会退場の挙に出、軍部右翼に〈ジュネーブの英雄〉視される。戦後A級戦犯となる。
松方正義	天保6～大正13	鹿児島		79+(2)	4代、6代の総理大臣。金本位制を実施。松方内閣の時、蘇峰は参事官となる。徳富猪一郎編「公爵松方正義伝」全2巻。
陸奥宗光	弘化1～明治30	和歌山	陽之助	4	外交官。日清戦争の遂行に精励し、下関条約には全権として活躍した。神奈川県初代知事
村山龍平	嘉永3～昭和8	三重		3	新聞経営者、「朝日新聞」を創刊。夏目漱石の作品を掲載して評判となった。1908年東西朝日を経営上合併した。
本山彦一	嘉永6～昭和7	熊本	松陰	27	新聞経営者、「大阪毎日新聞」社長。東京に毎日新聞社を創立。「東京日日新聞」を買収した。
森鷗外	文久2～大正11	島根	林太郎	1+[1]	軍医・小説家・評論家。「しがらみ草紙」を創刊。「国民之友」に小説「舞姫」を発表。逍遙と「没理想論争」を戦わす。
森田思軒	文久1～明治30	岡山	文蔵	90+(4)	ジャーナリスト・文学者。ユーゴの紹介や翻訳、批評文を発表した。「探偵ニール」「十五少年」などを訳した。
矢島楫子	天保4～大正14	熊本		14	女子教育家。日本基督教婦人矯風会を創立。女子学院長、東京婦人矯風会会長。廃娼運動に奔走。蘇峰の伯母。
矢野龍溪	嘉永3～昭和6	大分	文雄	81+(2)	政治家・小説家。「報知新聞」に入り、政治小説「経国美談」を著わした。改進黨の結成に参画した。
安田靫彦	明治17～昭和53	東京	新三郎	4	日本画家。非凡な構想をもとに、古画や有職故実の研究から得た豊かな知識を惜しみなく生かし、新しい歴史画を創作した。文化勲章を受章。
柳田国男	明治8～昭和37	兵庫		3	民俗学者、青年時代は新体詩人として知られた。「遠野物語」など多数の著書を出した。日本民族学の樹立・発展につとめ、〈柳田民族学〉をうちたてた。文化勲章を受章。
山県有朋	天保9～大正11	山口		57	3代、9代の総理大臣。軍制の確立、徴兵制の制定にあたった。伊藤博文と共に明治政府の最高指導者となる。徳富猪一郎編「公爵山県有朋伝」全3巻。
山路愛山	元治1～大正6	江戸	弥吉	25	史論家・評論家。「国民新聞」の記者から「信濃毎日新聞」の主筆となり、「独立評論」を創刊。日露戦争には主戦論を唱えた。
山田美妙	明治1～明治43	東京	武太郎	42+(2)	小説家・詩人・評論家。硯友社の中で最も早く世に認められる。「読売新聞」に時代小説「武蔵野」を発表し、言文一致の新進作家として名声を博した。
山田武甫	天保2～明治26	熊本		66	政治家。熊本県参事となり、英学校を創立。徳富猪一郎、小崎弘道、金森通倫等の人材を生んだ。九州改進黨を結成し九州における自由民権運動の中心となった。
山室軍平	明治5～昭和15	岡山		85	宗教家・日本最初の士官として日本救世軍の創設発展に尽力。「平民の福音」を刊行、民衆の説教者として各地を伝導、社会事業に貢献した。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
山本五十六	明治17～昭和18	新潟		1	海軍軍人(元師)。ハーヴァード大学に学ぶ。ハワイ真珠湾作戦を立案した。ソロモン諸島上空で戦死した。
山本実彦	明治18～昭和27	鹿児島		17	出版事業家・政治家。総合雑誌「改造」を創刊(大正8)し、自由主義、社会主義の世論を率いた。昭和初年、「現代日本文学全集」を刊行し、〈円本時代〉をつくった。
与謝野晶子	明治11～昭和17	大阪	晶	11	歌人・詩人。処女歌集「みだれ髪」を出版。〈明星派〉の指標となるとともに、浪漫主義詩歌として記念碑的作品となった。
与謝野寛	明治6～昭和10	京都	鉄幹	5	詩人・歌人。雑誌「明星」創刊。歌論「亡国の音」で旧派の短歌を痛烈に批判した。西村伊作らと文化学院を創設。
吉川英治	明治25～昭和37	神奈川	英次	1	小説家。高小中退後、職業を転々としながら小説を書き始めた。「朝日新聞」に連載された「宮本武蔵」は広い読者を獲得した。死の直前、吉川英治賞が設けられた。
吉野作造	明治11～昭和8	宮城		10	政治学者。「中央公論」に政治論文を発表し、大正デモクラシーに理論的基礎を提供した。明治文化研究会を設立し「明治文化全集」全24巻を編纂・刊行した。
吉屋信子	明治29～昭和48	新潟		12	小説家。「少女画報」に「花物語」を連載し、少女小説家として出発。長編作家としても知られ、戦後も旺盛な活動ぶりを示した。

(高野静子、影山 薫 作製)